2－1　民具の名称に関する基礎的研究

共同研究の活動概要

研究代表者　神野　善治

1．目的

世界中の人々の日常の暮らし、庶民の生産活動や衣食住などの生活文化を解明するのに、“民具”は、目に見える「かたち」を持ち、生きている「技」や「伝承」という無形の情報も伴う物質文化であることで、第一級の研究資料になりうる。民具研究は、このことを確信して、これまでにも様々なテーマで多くの成果を蓄積してきた。そして、この研究が我が国にとどまらず、世界的な比較研究に展開して、“*mingu*”が学術語として普及することも、決して夢ではないと感じさせる。しかし個別研究ですぐれた成果を上げても、民具を手がかりに生活全般を包括的にとらえる手法は、まだ必ずしも確立されているとはいえないのが現実だ。

民具による比較研究を実現する大前提として、生物学などの自然科学が研究対象を「種」として分類して把握し、これに「学名」を与えているように、民具においても「学名」に相当するような「標準名」の必要性が、かねてより提唱されていた。本プロジェクトもそのような要請を含めて立ち上げられたものである。しかし、改めて取り組むとなると、民具の命名体系には、それぞれの民族の自然観や世界観が反映し、また、地域性、時代性、階層性などさまざまな属性が絡み合い、個別の民具のあり方は実に複雑に交錯していることを再確認せざるを得なかった。人間の営為の産物である民具には、自然科学で捉えられるような明確な「種」の概念は当てはまらず、生活を支えている基本的な民具に限っても、隣接する種類の民具との境界はあいまいで、連続的に変化するのが基本的なあり方だと捉える必要があることが分かってきた。しかし、それを前提にしても、民具をひとつの民族、あるいは、一つの国の中で比較研究するためには、さらにまた日本と東アジア、その他のアジア、中東、ヨーロッパと国際的に比較対照しつつ展開させるためにも、まずは、比較研究の対象となりうる民具についての共通概念を何らかの方法で明確にしていく作業が求められるのである。そこで、本プロジェクトは、この極めて困難な課題に取り組み、従来の我が国における豊富な民具研究の成果を、大きく展開させていく方法の開発を目的とした。

2．経緯

1）2009 年度

2009 年度は、2 回の共同研究会（内、資料調査を兼ねたもの 1 回）と、2 回の調査を行った。

実は、民具の「標準名」に関する研究テーマは、民具研究がわが国において熱心に取り組みはじめられた約 30 年前にすでに話題になっていた。民具の比較研究において個別の具に「標準名」のようなものが必要だという議論は、財団法人日本常民文化研究所を切り盛りされていた河岡武春氏がすでに提唱され、個別に取り組んだ研究者もいたが、組織的な動きになることはなかった。

改めて検討を加えてみると、そもそも、広範な地域のさまざまな暮らしぶりの中で培われてきた民具を「標準名」という概念で捉えることが理論的に可能なのかという疑問が起こり、モノの名前の基礎的なあり方に立ち返って課題を整理したいと考えた。

以上のことから、この年は二つの方向からこのテーマに接近した。一つは、従来の日本語の方言

研究の成果により、民具の分野の呼称がどのように捉えられているかを整理し、地域的バリエーションが比較的明確な基本的な民具を抽出して比較検討する作業を試みた。わずかな期間であったが、興味深い事例が抽出され、今後への展開が期待された。また一方では、一地域で生活を全般的にかつ系統的に収集している優れた民具コレクションを手がかりに、名称の問題を考えるという方法を試みた。

2）2010 年度

2010 年度は、5 回の共同研究会を行った。国際常民文化研究機構主催の第 2 回国際シンポジウムでは、本研究班の中心テーマであるモノ、民具の名称に関する課題を取り上げていただき、国際的な観点からも討論を展開させることが実現した。また、関連の調査活動も実施できた。

初年度から民具名の分野別のリストを作成する作業を推進させてきたが、本年度もこれを継続、推進させた。またこの作業と平行して、すでに研究の進んでいる個別分野の成果を重ね合わせる作業も行い、民具のデータベース構築における「名称」について検討する機会をもった。

今年度の活動で、民具全般に関する名称のリスト化がメンバーの共同作業によってかなり進展させることができた。しかし、抽出された個別の民具について、再度ひとつずつ定義を検討し、リストを精査する必要性を感じた。そのうえで地方名を重ねていく作業を推進させることが有効であろうということが考えられた。

3）2011 年度

2011 年度は、4 回の共同研究会（内、資料調査を兼ねたもの 2 回）と、2 回の資料調査を行った。研究班としては、民具の名称について基本的な民具とその方言に関するリストの充実を図る作業に力を入れた。日本全国のうち、東北地方は福島県、関東地方は川崎市、中部地方は静岡県沼津市と岐阜県徳山地方、九州地方は鹿児島県、そして沖縄県に関して方言名称の抽出作業を促進することを模索した。以上は、参加メンバーの得意とする地方を選んだものであるため、大きく欠落している地方のうち、関西地方では、今年度、滋賀県立琵琶湖博物館の所蔵民具の調査が実現し、博物館の協力を得て、この地方の民具方言を一覧表に補足する見通しが立てられた。また、中国四国地方について情報が欠落していることをどのように補足するかが課題として残った。

また、地方における民具名の一覧表を作成し、各民具に対する各地での代表的な名称を抽出すること、それを吸い上げる形で全体の一覧表に反映し、少しずつ完成させていくという方針がほぼ決定された。

さらに、韓国ソウル市の高麗大学校博物館、国立民俗博物館を訪問して、民具の国際的な比較研究の可能性について検討する機会を得ることができた。

4）2012 年度

2012 年度は、研究成果の取りまとめとその発信の年度と位置づけ、そのための作業として 7 回（東京部会 5 回、全体会 2 回）の共同研究会を行った。

また、2013 年 2 月 16 日に共同研究「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」班（研究代表者／後藤明）との合同公開研究会「日本の船 ―技と名称―」を企画し、二つの研究班の接点を探る試みを行った。

成果報告書の内容としては、「民具対応表」および「地方別民具リスト」の作成を中心にすることを確認した。

開始当初は、まず暮らしの中で使われる道具を網羅した全体的な表「民具名称対応表」を作り、

そこに各地域の民具名称を当てはめながら、ふさわしい名称を確認しようと考えた。しかし、同一県内あるいは同一区域でさえ、同様の民具に対する名称が多様に存在する。そのため、各地域の民具を概観し、地域の全体像を確認したうえで、当該地域を代表できると考えられる民具の地方名を選定し、民具名称の全体表の中に落とし込んでいく方式をとることにした。

対象としてとりあげる民具をいかに「定義」するかということについては、以下のように考えた。「甕」と「壺」のように、その境界は元来あいまいであり、仕分けは困難であるが、それぞれの典型をとらえて、ある程度イメージを共有することはできると仮定した。基本的な民具に関して、それを規定する最低限の条件、典型的な特徴を定義し、地方ごとにモノとデータが明確な調査事例を重ねていく作業が有効ではないかと考えた。

5）2013 年度

2013 年度は研究の成果報告書である『国際常民文化研究叢書』の編集にあたり、2 回の共同研究会を行った。

諸般の事情により、7 月から 10 月まで活動が中断したため、成果報告書を分冊することに決定した。2014 年 3 月には、全国版の民具名称を掲載した『国際常民文化研究叢書 6 ―民具の名称に関する基礎的研究―［民具名一覧編］』を完成した。2014 年度には各地域の民具名呼称の一覧表を掲載した「地域呼称一覧編」を発行することを計画した。

以上、各年度の本研究班の活動概要を述べた。共同研究会の詳細、共同研究者の個々の活動については、『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』1 ～ 4 に掲載している。

3．成果

1）国際常民文化研究機構 第 2 回国際シンポジウム　公開研究会

2010 年 12 月 11～12 日に開催された国際常民文化研究機構第 2 回国際シンポジウム「“モノ”語り ―民具・物質文化からみる人類文化―」では、第 1 日目の公開研究会「民具の文化資源化―“モノ”研究の新たな挑戦―」において、本研究班の課題である「民具の名称」に関するセクションを設け、神野の問題提起、河野、川野、佐々木が発表し、八重樫がコメンテーターを務めて広く問題を提起するとともに、国際的な視野からの検討も展開した。各発表は以下の内容である。

第 2 回国際シンポジウム「“モノ”語り　―民具・物質文化からみる人類文化―」
公開研究会「民具の文化資源化　―“モノ”研究の新たな挑戦―」
Session Ⅰ「民具名称の諸問題」
1. 検索タグとしての標準名　―農具の歴史を踏まえて―　河野　通明
2. 民具名称のなりたち　―奥会津只見の事例から―　佐々木　長生
3. 比較文化研究のための民具名称　―ラオス北部と南九州の現場から―　川野　和昭

司会進行　神野善治
コメンテーター　八重樫純樹

2）合同公開研究会

2013 年 2 月 16 日に共同研究「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」班と本研究班による合同公開研究会が開催された。本研究会では「東アジアの伝統的な船」と「民具の名称」に

関する二つの研究班が、その接点を探る試みとなった。下記の発表は、残存する実物の船の情報集積（民具学的な研究）や技術復元の実験的研究に基づいた飛躍的展開があり、新しい「日本船名集」実現の可能性を予測させた。

合同公開研究会「日本の船　―技と名称―」（午後の部）

1.「船の船上作業と各部名称の関連」　昆　政明
（「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」班）

2.「日本の磯船　―その構造・船材・名称―」　真島　俊一
（「民具の名称に関する基礎的研究」班）

司会進行　神野善治

3）成果報告書

（1）『国際常民文化研究叢書 6 ―民具の名称に関する基礎的研究―［民具名一覧編］』

これまでの活動による成果、とくに地域で収集されている民具コレクションのデータを集積していくことでまとめることができた「民具名一覧」が、このプロジェクトの中心的な成果物である。全国版と地域版とは、それぞれ両極からの視点でまとめたことになる。2013 年 3 月には、全国版である 1 冊目の成果報告書『国際常民文化研究叢書 6 ―民具の名称に関する基礎的研究―［民具名一覧編］』を提示した。この成果報告書では、「解説編」で民具名のあり方を再検討した論考を示し、続けて「民具名一覧編」では、全国版として分野別に民具をとりあげ、分類的に配列したリストを提示した。その構成は下記の通りである。

<u>解説編</u>

共同研究の経緯　研究代表者　神野　善治
民具の名称について　―共通名と基本形態―　神野　善治
モノの名前の方言　―『現代日本語方言大辞典』を読み解く―　神野　善治
民具情報の構造と組織化に関する研究　八重樫純樹

<u>民具名一覧編</u>

「民具名一覧」の見方・使い方　―凡例にかえて―　神野　善治
農耕・畜産・山樵用具　―民具から歴史を探る―　河野　通明
漁撈・狩猟用具　神野　善治
養蚕・紡織・手工・諸職の用具　神野善治・石野律子・高橋典子・長井亜弓
運搬・通信・交易・旅の用具　神野善治・高橋典子
衣・食・住の用具　長井　亜弓
灯火具　高橋　典子
あとがき　河野　通明

（2）『国際常民文化研究叢書 9 ―民具の名称に関する基礎的研究―［地域呼称一覧編］』

最終年度は 2 冊目の成果報告書として、［地域呼称一覧編］を 2015 年 3 月に発行する予定である。地域ごとに検討を加えた「地域呼称一覧」を紹介するとともに、これを全国版の民具名一覧と合体させて、地域のデータ間の比較ができる一覧表を提示する。今後、さらに各地のデータを加えて改訂しつつ成長させていける民具名の一覧の基盤になればと考えたものである。